

「ねえ、起きなさいってば……」

そう言うと、美空は隣の席に座っている男子生徒の頬をつねった。

「ん……、もう少し寝かせてくれよ、昨日はほとんど寝てないんだから」

アカデミー附属高の制服を着た、この男子の名前はデイビッド・ムラカミ、仲間内ではデИБで通っている。

「ほら、もう到着するよ。起きろ！」

星野美空、彼女もアカデミー附属高の二年生。もうすぐ三年に進級する前の休暇に、仲間たちとの月旅行を計画したのも彼女である。

「まだ寝てるのか、しょうがないなデИБは」

前の席から身を乗り出して、そう言ったのは、やはり同級生のアンリだ。アンリ・ガブリエル。アカデミー附属高でも、常にトップランクの成績を誇る秀才、いや天才である。彼は専門課程では研究部門に進んで遺伝子工学の研究をすることになるだろう、というのがもっぱらの噂である。基礎課程の学生ながら、彼が書いた論文は学会でも注目を集めるほどの逸材だ。

そうしている間に、彼らが乗ったシャトルは降下を始め、窓からはクレーターだらけの月面が見え始めた。到着前のアナウンスの後、頭上のベルトサインが点灯する。ベルトサインと言っても、これは古来の伝統を踏襲しているにすぎず、もはやシートベルトなどという代物は、非常時を除いて使われることはない。かわって使われているのが、周囲の空間が物体に及ぼす粘性、つまり慣性力を制御することで、体をシートに固定するシートホールド装置である。これは、数百年前に発見されたヒッグス粒子の研究の産物だ。同様に、今、彼らが感じている機内の人工重力もその応用である。さらには、惑星間や外宇宙を航行する宇宙船が備えている重力エンジンから、ビルの昇降シャフトまで、すべて同じ原理で作り上げられている。加減速や軌道変更に伴う加速度、いわゆるGも同じ原理で制御されている。重力エンジン以外の動力に頼る乗り物でもほとんどGを感じないのはこの慣性制御のおかげだ、

シートホルド装置が働くと、体がやんわりとシートに抱きかかえられたような感覚になる。優しい感覚だが、それでいて体を動かさそうとすると、しっかり固定されていて、自由はきかない。緊急時は瞬時に体全体に制御がかかるので、数百Gの加速度でも、物理的な破壊が起きない限りは怪我すらない。ただ、そんな事態は衝突か墜落しかなさそうだから、その時点でシートホルド装置の役目を越えてしまっているのだが。

「もう到着か。早いな。本一冊読む暇もないなんて・・・」

そう言いながら、読んでいた本をシートポケットにしまったのは、アンリの隣に座っているフランクである。フランク・リービス、彼も仲間のひとり。パイロット課程を目指す彼も、成績ではアンリにひけをとらない。得意としている分野は宇宙物理学である。将来、宇宙船乗りか、物理学者かで目下進路を悩んでいるところだ。

「サラウンドにしてごらんよ。そろそろ真下にケプラーが見えるわよ」

そう言うのは、サラ・ホイットニー。通信と情報収集を専門とするC&I（コミュニケーション&インテリジェンス）を目指しているが、その情報処理能力には教師も舌を巻く。多くの情報から状況を推定して判断を下すスピードは神がかりとも言われるほどだ。ただ、少し性格的におおざっぱなのが玉に瑕である。

「嵐の大洋だね、マリウス丘のクレーター群も見えるよ」

美空が言う。ちなみに、サラウンドというのは、拡張視覚インターフェイスの、いわゆるサラウンドモードビューのことで、船の外部映像や各種のセンサー画像を直接イメージとして意識に投影する視覚インターフェイスのことである。人間の視覚は目で見えている範囲に限られるが、サラウンドモードでは上下や背後も含めて、すべての方向の状態を把握できる。不思議に思うかもしれないが、人間の脳内には実は全周マップと呼ばれるしくみが存在する。五感の情報は最終的には統合され、この全周マップに投影される。たとえば、音や皮膚感覚で、それが背後からの物であっても、その位置を認識できるのは、この全周マップがあるからだ。サラウンドモードでは、この全周マップに直接、全方向の映像を投影する。その感覚は不思議だ。背後も含め、すべての方向が同時に見えるのである。自分が鳥に、いや神様にでもなったような気持ちになる。

シヤトルは次第に高度を下げ、嵐の大洋を横切って、特徴的なケプラークレーターの真上を

飛び越える。やがて、差し渡しが100Kmはある巨大なクレーター、コペルニクスの縁をかずめ、その中央にある月面都市の宇宙港への最終アプローチを開始するのである。

軽いショックがあつて、速度がぐっと落ちてくる。宇宙港からの指向性磁場がシャトルをとらえたのだらう。地球静止軌道ステーションや、地球近傍のラグランジュ点(L1、L2)などにある宇宙都市と月を結ぶ航路を飛ぶ小型のシャトルは、一般に、ごく小さなエンジンしか持たない。ステーションや宇宙港にある射出用電磁カタパルト、いわゆるマスドライバーと、さらに、これらから放射される指向性の加速磁場によつて十分な速度を与えられるため、非常時以外、自力で行うのはコースの微調整のみだからである。航路の切り替えも、様々な軌道面に配置された加速ステーションからの指向性磁場と機体が発生する誘導磁場の相互作用によつてよつて行われ、最後に、到着地からの指向性磁場で減速、誘導されて着陸する。実際、アカデミーのあるL2ステーションを出発したこのシャトルも、月公転軌道面にあるいくつかのステーションを使つて軌道変更をした後に、月軌道上のステーションを経由してコペルニクス宇宙港への着陸コースに乗つたわけだ。

機外には荒涼とした景色が広がり、もうシャトルの高度より高くなつたコペルニクスの外縁が山脈のようにそびえ立っている。

「当機は、まもなくコペルニクス宇宙港に到着いたします。なお、着陸時のサラウンドモードの使用で気分が悪くなる場合がございます。サラウンドモードご利用中のお客様は十分ご注意ください」

着陸前の機内アウンスからほどなく、シャトルは宇宙港の到着デッキに滑り込む。この時点でもまだ、かなりの速度を保っているの、サラウンドモードではちよつと目が回る。数百メートルのトンネルを進む間にシャトルは磁場によつて一気に減速され、それから誘導路に沿つて搭乗ゲートまで移動する。

シャトルがゲートに到着すると、周囲がエアシールドで覆われ、空気が満たされる。その後、ボーディングブリッジが船体に接続され、ドアが開かれる。このあたりの様子は昔の飛行機と大きくは変わらない。月面のような衛星や惑星表面にある宇宙港に大型船が着陸することはほとんどない。大型船は、軌道上の宇宙都市にある宇宙港を発着し、それらの乗客や貨物は小型シャトルや、マスドライバーを使つて地上と行き来するのである。



月面施設の多くは地下に作られている。これは、太陽や宇宙からの放射線を避けるためだ。軌道上の宇宙都市の放射線防護は強化シールドと磁気防御にたよっているが、月面のような場所では、建設コストがかかる強化シールドよりも、天然の地殻を遮蔽のために使った方が効率がいいのである。眺望や採光のため、所々に、露天掘りで作られた場所もあり、その天井は宇宙都市同様に、透明度が変化する強化シールドで覆われている。月の重力は本来、地球の六分の一だが、慣れないと危険な上、長期滞在者は体力低下などの問題もあるため、人工重力を加えて地球並みにしてある。これは特殊なものを除き、太陽系内にある施設に共通の仕様だ。

コペルニクスコロニーは、ティココロニーと並ぶ月面最大の都市のひとつである。居住人口は500万人、地球圏の中でも大きな経済拠点であると同時に、その周辺はリゾート地域になっ  
ていて、多くの観光客を集めている。

「うわー、やっぱりすごい人だね。」

ゲートを出たところで、アンリ。

「なに田舎者みたいなこと言ってるのよ。これくらい、地球の大都市に比べたらかわいいもんじゃない」

と美空。

「まだ先があるんだから、急ぐわよ。もたもたしていると最終のルナトレインに乗り遅れるんだからね」

「はいはい。先導よろしく」

美空が先頭をきつて歩き出す。アンリ、フランク、サラ、そして、まだ眠そうなデイブが続く。ルナトレインは宇宙港と短・中距離のエリアを結びニアモーターの鉄道路線だ。真空の地下トンネルを進むこの列車の最大速度は、シャトルにも匹敵する。宇宙港がある中核都市周辺とそこから2〜3000Kmくらいまでの距離は、この鉄道が最短1時間程度でカバーしているのである。彼らが乗る予定のコペルニクス周辺エリア内のローカル線も同じ駅を発着して

いる。

「ウェスト・リム方面の出発はこっちなね」

美空がアウトバンドの案内表示を見ながら言う。アウトバンドというのは、音や光を使って、直接データを受信するインターフェイスの総称である。通常の視覚や聴覚が必要な音や光の波長域は限られている。音ならば、可聴域よりさらに短い波長の超音波領域、視覚ならば可視光の上下にある赤外、紫外領域の光をデータ伝送に使用するのがアウトバンドである。視覚や聴覚はその領域の音や光を感じられるように拡張されているが、それらは光や音としてではなく、データとしてデコードされ、その内容に応じて必要な神経系に直接渡される。通常の知覚範囲の外側を使うので、アウト・オブ・バンド、略してアウトバンドと呼ぶのである。この場合、コンコースにあるアウトバンド送信機から送信される赤外光領域の信号を使って流れてくる場内マップ情報を、案内板のイメージで拡張現実として見ることができるのである。ちなみに、さらに多くの情報が必要とする、たとえばサウンドモードビューなどは、直接、人間の神経系に電氣的に情報を送り込むダイレクト・インターフェイス、略してDIが使われる。超高速の無線ネットワークと、遺伝子操作で作られている体表面のインターフェイスポイントを接続する装置がDIユニットである。インターフェイスポイントは自由に、と言っても、本人が生まれる前の親の自由というのが正しいのだが、体のどこにでも作ることができる。標準仕様では、左右の手首付近で、この場合、DIユニットは昔の腕時計やブレスレットの形をしたものが使われる。オプションでは、ネックレスやピアスのようなものも作ることができるが、かなり高価なものになる。

「ちょっと待って。そっちは混雑してるみたい。この先からショートカットできるよ」

案内に沿って歩いて行こうとする美空をサラが引き留めた。C&Iである彼女が扱える情報量は多い。混雑情報や、一般には公開されていない情報をもとに近道を割り出したらしい。ちなみにアウトバンドやDIは、いわば通信路であり、それを使って様々な情報源に接続する機能は個別に実装されている。これらの機能は単にインターフェイスと総称される。一般にC&Iを志望する学生の場合、一般の学生よりも多くのインターフェイスを持っている。これは、親たちが持っている機能を受け継いだり、そうした進路も選択肢と考えて生まれる前に与えられたものだ。パイロット志望の学生が持つVPI、つまり仮想パイロット・インターフェイスも同様だ。このインターフェイスは様々な宇宙船や宇宙機、航空機の操縦に必要な機能との接続を提供する。またメデイカル系の学生は、仮想メデイカルインターフェイス、VMIを経由して、人の生体情報にアクセスできる。これによって、病気や患者の状態を直接把握できるの

だ。インターフェイスは特定の部分にある細胞に遺伝子を外から導入することで、後天的にも獲得できるが、高価な上に子供に受け継がない一代限りの機能になってしまう。

「サンキュー。助かるよ」

「持つべきものは、気の利いたC&Iの友達だな」

フランクが言う。五人は、少し先にある細い通路に入る。人通りはまったくくない。

「なんか、薄暗いよ、大丈夫？」

「ちよっと狭いけど、一応、駅までは抜けてる・・・はずよ」

美空は不安そうだが、サラはそう言うと、自分が先頭に立って歩き始める。だが、角をいくつか曲がった後、彼らの前に、閉ざされたドアが立ちはだかった。

「あれ、こんな所にドア？ マップには書いてないのに」

サラはそう言うちよっと考え込む。

「開かないのかな、このドア」

アンリがドアを調べるが、開閉操作ができそうなパネルはどこにも見当たらない。

「自動制御の非常ドアみたいだね。ここからじゃ操作はできなさそうだよ」

アンリが、まいったという感じで言う。どうやら行き止まりっぽい。

「えー、ここまで一本道だったし、また戻るしかないってわけ？」

「うーん、ごめん。それしかないかも」

「サラったらあ、裏道探しいいけど、もうちよっとよく調べなさいよね。それじゃ、C&I失格よ！」

美空はちよっとふくれっ面だ。

「戻るなら急がないと時間が無いぞ」

フランクが言う。元の道に戻って混雑した中を駅まで行くとすれば、もう最終列車ぎりぎりである。

「しようがないな、急いで戻るよ」

と美空は振り向いて行こうとする。

「ちょっと待てよ」

「何よ、デИБ。時間が無いって言ってるじゃない。あんた、まだ寝ぼけてるわけ？」

「まあ、まてよ……。多分、こうすれば……」

デИБがそう言うと、いきなりドアが開いた。

「開いた？ デИБ、あんたどんな魔法使ったのよ？」

美空が驚いて言う。

「あー、やっちゃったわけね」

と、サラ。

「やっちゃった……。って、お前、まさか、また？」

「これ、バレたらまずいんじゃない？」

フランクとアンリも声を揃える。どうやらデИБは、この区画の制御システムに割り込んでドアを開けてしまったらしい。わかりやすく言えば、ドアを制御しているシステムをハッキングしたということである。デИБはナビゲーター志望なのだが、コンピュータシステムにもやたらと詳しい。ゲーセンでも裏技の達人で、とりわけ格闘物では負け知らずだ。だが、公共のシステムをハッキングしたということになると、これはちよっとマズいわけで……

「あんたねー、ほら、逃げるよ！」

と言うなり、美空がドアを抜けて走り出したので、それに引っ張られて全員が走り出した。

「なんで、逃げないといけないのよ、これじゃ全員同罪じゃないの」

サラが走りながら叫ぶ。

「黙って走りなさいよね。そもそも、あんたが裏道なんて探すから・・・」

「そんなこと・・・、あ、そこを右！」

文句を言いながらも、サラは方向を指示している。入り組んだ通路をしばらく走ると、先に広場が見えてきた。

「そこが駅の西口広場よ」

5人は通路から広場に飛び出す。

「ふう、どうにか出られたみたいだね」

「まったく、冷や汗かいたぞ」

アンリとフランクはかなりバテた様子だ。そう言う意味では、この秀才二人よりも女子たちのほうが体力はありそうな感じがする。

「いやあ、まさかあんなに簡単に開くとは・・・」

デイブが頭をかきながら言う。

「こら、デブ！ 全部あんたのせいだからね、ちょっとは反省しなさいよ。うまく逃げられたからよかったけど・・・」

美空がデイブをにらみつけて言う。デブ、初対面の時に美空は彼をそう呼んで笑った。そう呼ばれる意味が最初デイブにはわからなかった。それが、美空の郷里の古い言葉で「太っちょ」を意味することを知ったのは後のことである。凶体はたしかにデカイデイブだが、この呼び名にはちよつと理不尽さを感じている。

「その呼び方はやめろって。まあ、とにかく無事にここまで来られたんだからいいじゃない



か。実際、かなり早く着けたみたいだし」

「あ、……あのね、どうも、そううまくは……」

サラがそう言う脇で太い声がした。

「君たち！、ちよつといいかな」

「はい？……」

「え？……」

「あつ……」

「……」

見るとセキユリテイと書いた制服を着た大男が二人。この時点で5人は、ようやく現実を悟った次第である。